

『山菜採りの社会誌 —資源利用とテリトリー—』

池谷 和信 2003年 東北大学出版会

廣瀬大悟

東北日本海側の豪雪地帯。足を滑らせれば命を落とす急斜面にとりつき、1日に50キロ、1シーズンで1トンものゼンマイを採集し、生きる人々がいる。達人に弟子入りし、共に歩き、彼らの発する言葉、一挙手一投足をつぶさに記録する。古老への聞き取りから、ゼンマイの採集テリトリーを地図化する。住人の日記から、ゼンマイの採集量や時期の変遷を復元する。「フィールドワーク」とは地道で、時として命がけの作業である。

しかし、フィールドで起こるミクロな出来事の単なる記述はルポに過ぎない。そこから紡ぎだされる「社会誌」とは何であるか。フィールドワークの価値とは何か。環境人類学、人文地理学を専門とするフィールドワーカー、池谷和信は、どのような答えを我々に示してくれるのだろうか。

本書は、ゼンマイ採集を生業とする東北地方の山村をフィールドとして、採集社会の資源管理と利用におけるテリトリーについて、ポリティカルエコロジーの枠組みを活用して動的に描くことを目的とする。

テリトリーの研究は、人文地理学、進化生態学、歴史学などの分野において、狩猟、採集、放牧といった生業に依拠する自然社会を対象に行われてきた。本書では先行研究として、「資源密度」と「資源予測可能性」の2変数でテリトリーを捉えるモデルが紹介されているが、ここには地域住民への政治、経済的な影響など、動的な要素が含まれていない。そこで池谷は、K値[資源要求充足度=資源量/(採集者数×採集要求量)]という概念を導入する。ここで重要なのは、その時々地域社会における政治、

経済的状況によって変動する「採集要求量（＝採集者が採りたいと思うゼンマイの量）」を用いた点である。ここに、地域社会における資源利用を、政治経済との関わりの文脈のなかで動的に把握しようとするポリティカルエコロジーの視点が活用されている。

本書の事例では、採集テリトリーは、①パッチ型（テリトリーが離れて点在）→②隣接型（テリトリーが隣接）→③競合型（テリトリーが境界を失い混在＝崩壊）という変容を遂げた。①→②の変容は、ゼンマイの商品化が契機となり、②→③の変容は、ダム建設に伴う、過去3年間のゼンマイ採集実績に基づく補償金の支払い制度が契機となった。いずれの場合も、ゼンマイの採集要求量が高まることを意味し、結果としてK値は減少する。すなわち、政治経済的な要因を契機にK値が変動し、それに伴ってテリトリーの形態も変容してきたと池谷は考察する。また、適度な採集要求量に基づく適切なテリトリーの存在は、持続的な資源利用を可能にすることが明らかになった。

ゼンマイ採集というマイクロな事例から、テリトリーに関する一般的化された理論を紡ぎだしている点が、社会誌としての本書の意義であり、フィールドワークの有用性を実証的に示している点であろう。しかしながら、市場経済が波及した現代の世界において、資源要求量は莫大であり、テリトリーはいたるところで崩壊し、狩猟、採集、遊牧、焼畑などの生業、またそれらに依拠した自然社会は存続の危機にさらされている。このような現代社会の未来を考えるうえで、本書の核である、自然社会をフィールドとしたマイクロな視点は、どのような示唆を与えてくれるだろう。

池谷の理論を踏まえると、持続可能な資源利用の実現には、ある程度、排他的に守られたテリトリーを確保、維持する必要がある。同時に、人々の資源要求量を把握し、コントロールするというマイクロな視点に基づく政策形成のプロセスが欠かせない。このように、池谷が提示した視点を再帰的に捉え、今後の社会に実践的に活かす視点に組み込みながら、テリトリーや資源利用への議論がさらに深まることを期待したい。

（都市イノベーション学府博士前期課程・都市地域社会専攻）